

## オランダ近代経済史の一問題点(一)

内田直作

## 一 はしがき

オランダ近代経済史はウトレヒト同盟(一五七五)に始まる。十六世紀におよんで、宗教改革運動の展開されるとともに、北部オランダの住民達はカルビン教の影響をうけ、法主権力の濫用による献金や免罪符の売買に反感をもつのみならず、カトリック体制下のスペイン国王フィリップ二世(一五五六—一五九八)の圧制に反抗して、カルビン派はオレンヂ家ウイリアム公William of Orangeを指導者として一五六八年スペインに対する自由戦争を開始した。ついで、一五七九年北部オランダのヘルレGelre・ホーランドHolland・ゼーランドZeeland・ウトレヒトUtrecht・フリースラントFriesland・オーペーセルOverijsel・フローニンゲンGroningenの七州のウトレヒト同盟の結成となり、北欧最初の共和体制のオランダ共和国の成立をみた。ス

オランダ近代経済史の一問題点

ペインの圧制に対する宗教戦争を通じて政治的独立の獲得、すなわちオランダ革命の成功をみるのみならず、併行して自立的経済勢力としての発展過程が開始された。革命の宗教的・政治的・経済的三要素はその当初から相併行して進んでいた。

その後のオランダ経済の発展の特徴については、ゾムバルトが引用するところのルザック ≡ Luzac の言葉の「オランダ人は商人（自己計算の）であることをやめて、手数料商人（他人計算の）となり、ついで手数料商人から最後に金貸となった」<sup>(1)</sup>（括弧は筆者註）に簡潔に明らかにされる。さらに、ゾムバルト自身の言葉の「オランダのブルジョアはその他の諸国（筆者註、ことにフランス）の場合のように封建化、≡ Fudalisiert はしなかったが、まあいふなれば——肥満したのである。」<sup>(2)</sup>のごく、十七、八世紀の経過において海上企業を主体とするオランダ商業資本はその巨大な商業資本の蓄積をみて後も、近代的産業資本への転換をみないで、むしろそれを通りすごしてそのダブついた商業資本をもって安易な金貸資本に墮していった。このような十七、八世紀代の重商主義時期におけるオランダ資本の特性は、十九世紀初頭一八一五年オランダ王国の成立をみ、自由主義時期開始後の一八二三年に設立されたオランダ商會社 ≡ *Nederlandsche Handelsmaatschappij* のその後の発展経過をみる場合にも同様な傾向が跡づけられる。設立の際は貿易会社としての商業資本、それも当初の自己計算取引から委託販売制に移行し、最後に金融資本へ転換していつている。<sup>(3)</sup>

右のごときオランダ資本主義の特性のほか、十七世紀のオランダにおける東インド貿易と新大陸貿易との対立の問題が提起される。右については、大塚久雄教授の「近代資本主義の系譜」（学生書房、一九四九年発行）のうち「第五、第十七世紀に於ける東印度貿易と新大陸貿易との対立」と「第六、ウイルレム・ユセリンクスの

眼に映じたる東印度貿易」にその問題点が明らかにされている。そこではヨーロッパから東インドへ輸出される  
ところの商品のうちもっとも主要な部分は「銀」（貨幣商品）によって占められ、この「銀」が新大陸から獲得  
された点で、東インド貿易と新大陸貿易はきわめて密接な相互依存関係を形造っていた。この一体的関係をなし  
ていた東インド貿易と新大陸貿易とが「対抗的」な、「相剋」の関係におかれていたことを問題点として提起さ  
れている。その問題点は十七世紀初期におけるオランダの植民地活動に際しての対立的関係であって、その対立  
的党派の一つはオランダ西インド会社の設立に関して民主主義的プランを提唱したユセリンクス *Willem Uss-  
elinx*（一五六七—一六四九）およびその徒は同時に東インド会社における反抗的投資者群の指導者であり。か  
つ宗教的、政治的にみれば「カルヴィン派」 *Calvinisten* とよばれる党派に属するものであり、これに対して  
ユセリンクスのプランを庄しつづいたホラント州会を支配せるものは東インド会社の専制支配者である「取締役」  
と密接にからみあい、その利害を一にしている人人であって、宗教的、政治的にみれば彼等は「自由派」 *Lib-  
ertijne* とよばれる党派を形造っていた。すなわち、自由派とカルヴィン派の利害の対立が東インド会社と西イ  
ンド会社をめぐって斗われ、しかも自由派の利益はとくに東インド貿易にむすびつき、カルヴィン派の利益はと  
くに新大陸貿易の振興にむすびついているという正反對の関係にあったのである。東インド貿易と新大陸貿易と  
は素材的には一体性をなしながら、しかもそれぞれ異った社会層の利害にむすびつき、いわば社会的には「対抗  
的」な、あるいは「相剋」の関係におかれていた。そしてこの対立関係はそもそも何故であったか。この何故の  
問に対していかなる経済史的事実をもって答うべきかが私の提起するところの問題であるとされている。<sup>(4)</sup>

右の提起された東インド貿易と新大陸貿易との社会的対立関係の依拠した経済的事実として、まず自由派の推

進した東インド貿易の輸出品目は「アメリカで奴隷制的に生産された銀」であり、輸入品目は粗悪な絹物のほか、香料につぐ香料で、東洋で非資本主義的に生産された奢侈品であり、旧い形態の仲立商業であつて、自由派は専制型の前期的商業資本に属していた。ついで、カルヴィン派の推進した新大陸貿易については輸入品目は銀のほか塩、毛皮、産糖、棉花等の「本国での資本主義的マニユファクチュアの原料品からなり、一方輸出品目は毛織物、金屬製品のごとき工業生産物であり、カルヴィン派は民主型の近代産業資本家層していた。オランダ初期資本主義における右のごとき自由派の商業資本家層とカルヴィン派の産業資本家層の社会的対立に際して、前者の力が勝を制して産業資本の利害とむすびついた新大陸貿易は商業資本の「香料商人的政策」の犠牲となり、西インド会社と新大陸貿易は萎微してふるわず、産業の發達は結局十七世紀以降イギリスによって完全に凌駕されることとなつた。イギリスでは、オランダの場合とは逆に産業資本が商業資本を屈服していたからであるとの解答を指示されている。

同教授の明快な指示には何等の論議をはさむ余地はないのであるが、何が故にオランダ初期資本主義において自由派の商業資本家層がカルヴィン派の産業資本家層を圧倒していったのか。さらには、マックス・ウェーバーが、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」のうちに明らかにしたごとき近代資本主義の發達に際して決定的な影響を与えたカルヴィン派が何が故にオランダではイギリスの場合とは逆に屈服せしめられていったのか。この問題の解明に際して、同教授の明快なオランダ初期資本主義における問題点の解明は、マックス・ウェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義精神」のうちに展開したところの論拠によって支持されている。<sup>(6)</sup>したがって、ここではカルヴィン派こそがオランダ資本主義の精髓であり、対立する自由派はオランダ近

代産業資本主義の開花をついはんだ前期的商業資本として、同教授の近代資本主義の系譜の埒外に捨て去られてしまっている。

筆者はきわめて乏しい資料に制約されながらも、当時のオランダの社会経済史的背景を通じて自由派の立場を弁護し、むしろオランダ初期資本主義の近代化についてはカルヴィン派よりも自由派の政策に負うところがさらに大であり、そのことこそアムステルダムにおけるカルヴィン派の単独支配の時期を僅か七年間（一六一八—一六二五）にとどめしめた所以であることを明らかにしたい。ウェーバーが唯物史観の一面的解釈を批判したことには同調しながらも、ウェーバーの見解を固執する場合には十分な歴史的理解をばむ場合のあることも否定されえない。以下、オランダ初期資本主義における自由派とカルヴィン派の対立をめぐる経過を探索して、大塚教授の提起された問題点にもついて省察を試みることにしたい。

- (1) Werner Sombart, *Der Bourgeois*, München u. Leipzig, 1920, S. 188
- (2) W. Sombart, a. a. O. S. 188
- (3) 西野照太郎、「和蘭商社会と東印度」(一)、(二)、(三)、新亜細亜、第四卷、第九、十、十一号所載
- (4) 大塚久雄著「近代資本主義の系譜」一九四九年学生書房刊行、第一三一—一三四頁
- (5) Max Weber, *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, (Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Tübingen, 1922)

二 自由派 ≡ アルミニアン派

オランダがブルガンディ公支配の時期からスペイン国王チャールズ五世の支配に移り、さらに一五五六年チャールズ五世の子フィリップ二世（一五五六—一五九八）の治世が始まるとともに、宗教改革の斗争が開始した。オランダには一五二〇年からはルッター派、一五三〇年からは再浸礼派 ≡ Anabaptism といいで一五四三年からはカルヴァン主義の出現をみ、一五六〇年からはカルヴァン教徒の急速な増加をみていた。<sup>11)</sup> 熱狂的なカルヴァン教徒のカトリック教会の破壊が南部から北部オランダにかけてはげしくなるとともに、一五六六年にはフィリップ二世はオランダの全面的破壊も辞せずとしてアルバ公 ≡ Duc d'Albe を派遣し、翌一五六七年九月からスペイン側のテロ支配が開始した。オランダ側のホーランド・ゼーランド・ウトレヒトの三州の都市支配者のオレンジ公は自由派であり、スペインの暴力支配には反抗を指導したが、宗教的にはむしろ自由と寛容の回復を期待していた。だが、自由派は上層の貴族・ブルジョア・インテリからなる少数党派であり、多数で熱狂的なホーランド・ゼーランドのカルヴァン派に漸次引きずられていった。オレンジ公の意図による一五七六年十一月八日のゲントの講和 ≡ La Pacification de Gand もカルヴァン派によって無視されてしまった。一五七九年にはカトリック教徒側のアラ同盟 ≡ La Confédération d'Arras（同年一月六日）に対し、カルヴァン派はオランダ北部七州 ≡ Gelre, Holland, Zeeland, Utrecht, Friesland, Overijssel, Groningen（同年一月二十三日）の同盟を強行した。主権者を任命しない独立七州の同盟によるオランダ共和国の成立をみた。

同盟は信仰の自由を布告したが、ホーランド・ゼーラント両州ではカトリック教徒はその自由を与えられなかった。すでに革命当初から宰相オルデンバルネフェルト＝Grand Pensionnaire Johan van Oldenbarneveltを首領とする自由派と、マウリッツ＝Maurits van Nassauを指導者とするカルヴィン派の対立がみられた。以下、まずこの両派の宗教的対立、ないしはその思想的背景について一瞥しておきたい。

「自由派」は別に「アルミニアン派」＝Arminians または「抗議派」＝Remonstrants とよばれ、オランダ人の新教神学者のゼームス・アルミニウス＝James Arminius (died 1609) の教えにしたがう党派であった。アルミニウスはカルヴィン僧正の見解、ことに神は大昔より救済と処罰を予定したまうとの残酷な運命予定説＝Predestination に対し反対していた。カルヴィン派では世俗的權威は教会の權威に従属せしめられていたが、アルミニアン派は予定説の絶対性を否定し、より自由かつ寛容であり、カルヴィン派のおそるべきドグマを捨て、政治的分野においても僧侶の主張と市民国家の法律との中間で何等かの取引を実現せしめることに努めた。カルヴィン派のきびしさを緩和してより合理主義的な態度を保持していた。<sup>(2)</sup>

アルミニアン派の指導者の一人であったユーゴー・グロティウス＝Hugo Grotius (1583—1645) も「キリスト教には物的証拠をもって根拠づけられない神祕の存する限り、国家はそれを人々の良心に強制しえないし、いかなる人でもそれを信じないからといって罪することはできない<sup>(3)</sup>」とし、カトリックの宗教裁判や、カルヴィン派の旧教徒に対してのみならず、多少でも見解の相違する新教徒に対してすらの非妥協的な不寛容の態度を難詰している。暴力行為、ことに当時の諸国間の宗教戦争を否定し、戦争回避のための手段としては一、会議、二、仲裁、三、抽選を提唱し、フランスに避難中に戦時平時の国際法＝De Jure Belli ac Pacis (Paris, 1625) を

出版したことは著名の事実である。その宗教的自由は市民的自由から、ひいては海の自由 *Mare Liberum* にすら結びついていた。「海の自由」はアゾーレスとケープ・ベルデ諸島西方一〇〇哩の南北線を分岐点として西方の新発見の諸国はスペイン領、東方のそれはポルトガル領と定めたローマ法王アレキサンダー第六世の滑稽な勅書（一四九三年五月四日）を攻撃したが故に、ローマ法王は発禁書とし、その解かれたのはやっと本二十世紀初頭（一九〇一）でさえあった。

アルミニアン派の首領のオルデンバルネフェルトは当時のヨーロッパの随一の政治外交家であり、一五九六年にはスペインに対抗する英・仏・蘭三国同盟の結成に成功し、一六〇二年にはオランダ東インド会社 *Vereenigde Oostindische Compagnie* を創設し、ついで一六〇九年には強硬なカルヴィン派を抑えて前述した<sup>4)</sup>ことくスペインとの十二年間の休戦条約を締結した。

オランダ東印度会社が切士丹禁制下の江戸時代平戸から長崎出島の蘭館貿易を幕末にいたるまで独占しえたことは、若干の献上品によるよりは東インド会社を設立したアルミニアン派の宗教的自由の態度、ないしは宗教的無拘束性、無非難性が江戸幕府に受けいられたものと推察されるのである。<sup>4)</sup>

一六〇九年の休戦条約はスペイン側にとってはさらに大規模の戦争を再開するための時をかせぐものともいわれた。スペイン王フィリップ二世はオランダ全人口を死刑に処するとの宣告をおごそかに承認し、一方カルヴィン派も神に選ばれたる人々として不信者・偶像崇拜者に対し戦争を開始することの理由を見いだすことにのみ努め、平和の息吹は何処にも感ぜられなかった。一五六八年から開始されたスペインとの相互の殲滅戦争を休戦にとりつけたことはオルデンバルネフェルトの大きな功績であった。だが、三十年戦争の開始する一六一八年熱狂

的戦斗主義のカルヴィン派のクーデターによりオルデンバルネフェルト、ユーゴー・グロチウス等は逮捕され、前者は翌一六一九年五月十三日処刑され、グロチウスは一六二一年フランスへ脱出した。カルヴィン主義が阿姆斯特ダムを単独支配した期間は一六一八年から一六二五年にかけての僅か七年間にすぎなかった。その後はカルヴィン派は漸次アルミニアン派支配のもと庄えられていった。

アルミニアン派の宗教的自由の態度はあらゆる本質的断面でロッテルダムの神学者エラスムス = Desiderius Erasmus (1466—1536) の人道主義的信仰理想をうけついでいた。彼はローマ教会主義を批判し、一切の暴力を否定してルッター派の頑固な態度にも反対した。人の自由意思を認めなければ神の正義も慈悲も意味がないとして、ルッター派の否定する人間の自由意識を高く評価していた。イギリスの人道主義者トーマス・モーア = Thomas More (1478—1535) と親交深く、一五〇九年には痴愚神札讃 = *Moriae Encomium* を書いてモーアに献じている。暴力武力行使を否定するエラスムスコそ平和主義者のアルミニアン派の偶像であった。その宗教的自由意識は商人の自由の概念と結びつき、市民的・宗教的自由はしっかりと産業の開花とも結びついていた。この宗教的無拘束性と無非難性は当時のヨーロッパでは新奇なものですらあった。

メアリー女王 (一五四二—一五六七) 支配のイギリスからの新教徒、エリザベス女王第一世支配の際のカトリック教徒、スチュアート王朝時代の清教徒達、南部のスペイン領オランダからのカルヴィン教徒、アントウエルベンから移住してきたイタリーの金融業者、ナント勅令 (一五九八) 前とナント勅令廃棄 (一六八五) 後フランスから逃れてきたユグノー徒、三十年戦争 (一六一八—一六四八) の際ライン川を下ってきたドイツ人、イペリアから追放されたユダヤ人等、豊かな資本と技術、智識をもつ人達のオランダは避難集会所となった。それ等の

移住避難者達には市民権さえ与えられ、オランダのその後の産業と金融の発展に大きく寄与した。

そこには宗教的無拘束性を反映してカトリック教徒のうちではメーヘルンから移住してきたヨハン・ファン・デル・フェーケン<sup>(5)</sup> || Johan van der Veken (一六一六年死亡) はロッテルダムの最大、最有力商人の一人であり、スコットランド人のウィリアム・デヴェイッドソン<sup>(6)</sup> || William Davidson は十七世紀のアムステルダムにおけるもっとも勢力ある商人でもあった。オランダの商業精神は宗教的差別をおしつづし、宗教的自由を産業繁栄の条件としてオランダ資本主義の発展が促進されていった。アルミニアン派がオランダにおける宗教的自由、市民的自由、ひいてはオランダ国家の基本原則ともなった経済的自由を形成せしめていった側面における努力は高く評価されなければならない。この自由こそ前後八十年間(一五六八—一六四八)にわたるスペインに対する戦争を通じてオランダの勝ち得たもっとも貴重な成果であったといえよう。

(1) Frans van Kalken, *Histoire de la Belgique et de son expansion coloniale*, Bruxelles, 1954, p. 293,

304

(2) Ernest Nys, *Hugues Grotius*, (Hugo Grotius, 1625—1925, Leyden, 1925.) pp. 19, 20  
 (3) Andrew Dickinson White, *Grotius "De Jure belli ac pacis"* (Hugo Grotius, 1625—1925.) p. 55  
 (4) 幸田成友「和蘭雑話」にはカロン || Caronの江戸幕府への燭台等の贈物等のごことが力説され、宗教面の点については何等ふれられていない。

(5) Ernst Baasch, *Holländische Wirtschaftsgeschichte*, Jena 1927, p. 9

(6) E. Baasch, *op. cit.*, p. 13.

### 三 カルヴェイン派Ⅱゴマーリスト

ここで眼を「カルヴェイン派」に転じよう。オランダにカルヴェイン主義の出現したのは一五四三年であり、一五六〇年以降急速に弘まっていた。カトリシズムに対するカルヴェイン教徒の反抗は漸次苛烈となり、一五六六年八月には南部から北部にかけての各地にカトリック教会・聖人の偶像・貴重資料等の破壊焼却をほしいままにした。翌一五六七年からはオランダにおけるスペインの暴政が開始し、一五六八年自由派のオレンヂ公は彼にとつて宗教問題は第二義的であったが、スペインの圧制を對抗するため戦争を開始した。

上層の貴族、僧侶、ブルジョア達で構成される自由派が妥協的態度になりがちなのを圧えて、ホーラント州・ゼーラント州の熱狂的な大衆で構成されるカルヴェイン派はカトリック派のアラ同盟に対しオランダ北部七州のウトレヒト同盟Ⅱ「Union d' Utrecht (一五七九・一・二三)」を結成したことは前述の通りである。<sup>(1)</sup>

自由派は懐疑的なカトリック派に対してのみならず、頑固なカルヴェイン派とも対立する宿命に立たされていた。自由派が別にアルミニオン派と呼称されることに対して、カルヴェイン派は「ゴマーリスト」Ⅱ「Gomarists」もしくは反抗議派Ⅱ「Anti-Remonstrants」も呼ばれていた。カルヴェイン派がライデン大学の神学教授のフランス・ゴマーⅡ「Francis Gomar (1563—1641)」の追隨者でもあることにもとづいていた。ゴマーⅡは彼の同僚のアルミニウスの主張に反対して正統なカルヴェイン主義の熱心な弁護者であった。アルミニオン派もゴマーⅡも愛国者であることにかわりはなかったが、後者は熱狂的なスペインのカトリック体制に対する主戦派であった。ゴ

オランダ近代経済史の一問題点

マールリストは太古からすでに救われるものと罪されるものとを神が予定するとの酷薄な観念を固持し、俗世的權威を教会權威に従属せしめることを主張した。アルミニアン派はより明るくしたがって温和であり、ゴマールストのおそるべき予定説のドグマを捨て、政治的にも妥協的な平和主義者であった。両派の対立には宗教的と政治的問題がからみあっていた。

アルミニアン派の首領で、ホーランド州の国爾尚書で弁護士でもあったオルデンバルネフェルトは一六〇九年スペインと十二年間の休戦条約の締結に成功したが、それは四十二年間にわたる戦争の後にから得た休戦であった。スペイン国王フィリップ三世（一五九八—一六二一）はオランダを自由の国として承認し、西インドにおける貿易の権限を与えた。南部のアントワープの没落に反してそれは北部オランダ経済の復活を意味するものともみられたが、その夢ははかなく消えた。一六一八年ゴマールストの首領のマウリッツ<sup>80</sup> *Mauritz van Nassou* のクーデターにより、平和主義者の老いたる七十一才のアルミニアン派の首領のオルデンバルネフェルトは処刑され、一六二五年までの七年間アムステルダムにおけるゴマールストの単独支配の時期の実現をみた。カルヴァイン派ないしはゴマールストに属したユーセリントクス<sup>81</sup> *Willem Usselinx* (1567—1647) がオランダ西インド会社<sup>82</sup> *Nederlandsche Westindische Compagnie*（資本金応募総額七、一〇八、一〇六フローリン）を設立したのはまさにこの時期に属する一六二二年六月であった。東インド貿易の場合のごとく、本国製品の裏づけがなくて金銀の輸出と植民地商品の相互の交易による純然たる仲立商業とは相違して、ユーセリントクスの企図には大塚教授の強調されるごとく、「金額の獲得でなく、本国と西インドとの間における製造品と原料品との相互に有利なる交易」を目的とする近代産業資本的基調が支配していた。だが、このカルヴァインの影響をうけた南オ

ランダからの避難者のニューセリックスの企図はほとんど実現をみないで、オランダ西インド会社はその設立の当初からカルヴェイン派の熱狂主義を反映して、合理的な本国植民地間貿易の遂行というよりは新領土におけるスペインとの戦闘に終始し、会社の利潤は多くの場合戦争と掠奪から生みだされたものであった。

一九二四年には当時スペイン領のブラジルの首都サン・サルヴァドル *San Salvador* を占領し、一六二三年から一六三六年間に会社が捕獲したスペイン・ポルトガル船は会社の記録によれば、五四五隻で、その価格は六〇〇〇万フローリン、掠奪貨物の価格は三、〇〇〇万フローリンを算していた。<sup>(3)</sup>そこにはアルミニアン派の平和的な自由通商の零囲気はみられなかった。(未完)

- (1) Frans van Kalken, *op. cit.*, pp. 304—343
- (2) Ernst Nys, *op. cit.*, pp. 19—20
- (3) *Memoires sur le Commerce des Hollandois, dans les Etats et Empires du Monde.* Amsterdam, Chez Du Villard & Changuion, 1718, pp. 171—2.